

# 日本におけるテニス競技力向上の研究

## A study of the tennis competition power improvement in Japan

1K04B177-5

羽石 祐

指導教員

主査 間野義之先生

副査 加藤清忠先生

### 目的

自分は14年間テニスを続け、それに一心に打ち込んできた。その過程で世界各国を遠征し、日本と世界の様々な相違に触れてきた。そこで自国の競技力不振に疑問を感じ、世界で活躍できる選手を育て、世界に輩出していく為には、何が必要なかを明確にしたいと考えるようになった。

今でこそ10代の選手が日本ランキングトップ10に入るようになってはきたが、ここ10数年を見る限り世界ランキングでトップ100に入ったのは、松岡修造氏ただ一人である。では世界との差は何なのだろうか。

身体能力の差か、衣食住の問題か、成長過程での環境の差か、それとも教育制度、マネージメント制度の相違なのか。原因は様々考えられると思うが、今回自分は「教育制度」「マネージメント制度」「環境の相違」の3つに注目して研究を進めていくことにした。その中で、日本テニス界の世界における競技力不振の原因を見つけ出す事がこの研究の目的である。

### 方法

自分が考える世界との相違点と、違った角度での意見を取り入れるため、日本テニスランキングトップ10のプロ選手と、学生の日本代表選手にインタビューを行い、アンケートを取った。

アンケート項目として、①競技力向上のためにこれから日本が改善していくべきだと思うものはどれかを選択してもらうもの。②現在の日本の制度で1番競技力向上の妨げになっていると思うところはどこかを記述してもらうもの。③これからの日本人選手に1番必要なことは何だと思うかを記述してもらうもの。④日本人トップ選手と世界のトップ選手の一番の違いはどこだと思うかを記述してもらうもの。といった4つのアンケート項目を設け、日本人トップ選手の世界との相違に関する意識調査を行った。それに加え、世界ランキングトップ10の選手と日本ランキングトップ10選手の簡単なプロフィールを掲載し、テニスを始めた年齢や、経歴、プロに転向した年齢などを比較した。

### 結果

アンケート項目①の「競技力向上のためにこれから日本が改善していくべきだと思うもの」については、教育制度、マネージメント制度が4人の同数で、次いで環境の違いが多かった。

で環境の違いが多かった。

次のアンケート項目②の「現在の日本の制度で1番競技力向上の妨げになっているものは何だと思うか」についても、教育制度や、環境問題が多く挙げられていた。それに加えて、大会数の少なさを指摘する選手もいた。ここで特徴的だったのは、多くの選手が明確に問題を挙げているのに反して、2人の選手が「妨げになっていることはない」と答えたことである。

続いてアンケート項目③の「これからの日本人に1番必要なものは何か」については大きく分けて「テニス先進国での海外経験だ」という意見と「自分の気持ち次第だ」という2つの意見に分かれた。幼少の頃にはわからず、プロになって初めてわかることも多いと選手たちは話していた。

最後の項目である「日本のトップ選手と世界のトップ選手の1番の違いは何か」については意見が1番多かった。「環境の相違」「大会数の違い」「本気度の違い」「サブカの技術的な違い」様々な日本テニス界における問題点が浮き彫りになった項目であった。

### 考察

自分が問題視していたため、今回研究対象として選択した「教育制度」「マネージメント制度」「環境の相違」だったが、アンケート結果から日本のトップ選手も同じような懸念を持っていることがわかった。

教育制度においては、幼少の頃から競技に集中できるようなカリキュラムを作る必要があり、小学校や中学校を巻き込んだテニススクールが必要だと言うことがわかった。

マネージメント制度においても目先の利益や自社の売名だけを考えるのではなく、選手の将来性にかけて投資やサポートをしてくれる企業が必要だという結論に達した。

環境の相違については、まず日本人の選手だけでなく、それを指導するコーチやトレーナーもテニス先進国の文化や慣習に触れ、世界で活躍する選手を育成する為の技術論や方法論を学ばなければならないということがわかった。それと同時に、それを学んだ選手や指導者が、選手達の多くが感じていた「幼少の頃にはわからず、プロになって初めてわかること」を、選手がプロになる前に伝える事が絶対に必要である。